# 第四百六十八回　青葉会句会報

令和七年四月二十四日(木)
場所：世田谷区三茶しゃれなあど

選　者　川口孤舟

投句・選句　柿崎忠彦　川口孤舟　久米五郎太　熊谷くにお　後藤とみ子　小早健介
在間千恵　佐藤ただしげ　高橋康敏　田島正己　土谷堂哉　豊田ゆたか　西澤國護
福島正明　古川百合子　古田昇　星田啓子　山崎亜也　山田けい子

選句のみ　伊賀山そらお、梅崎くすを　重枝孝岳　庄司龍平　高橋清子　橋口隆　山内天牛
山本三恵　渡邊盛雄

## 【互　選　句】　◎は孤舟選者の選　選者欄の○は選者の「天」

十点

親友の妻より封書春の雷　堂哉　（そ・くす・健・龍・康・昇・正・百・啓・○三）

◎花を出て花へと戻る観覧車　昇　（○そ・くす・孤・健・と・龍・○康・○堂・亜・け）

九点

◎ふらここの鉄の匂ひの手を洗ふ　康敏　（孤・五・千・孝・昇・啓・亜・け・天）

七点

春深し卒寿を見舞ふ米寿かな　健介　（○くす・く・千・龍・ゆ・百・け）

◎カステラの薄紙剥がす花曇　康敏　（そ・孤・○と・○昇・正・啓・盛）

チューリップ紙からはみ出す園児の絵　けい子　（忠・健・く・○孝・隆・天・盛）

六点

天穹に獣道あり鳥帰る　孤舟　（清・康・己・○正・昇・三）

磯の香の膨らんでくる焼栄螺　仝　（く・た・清・康・啓・天）

目を閉じた野仏に会う春うらら　けい子　（そ・五・千・國・啓・亜）

五点

◎鳥雲に戊辰の役の墓群かな　くにお　（健・孤・五・千・清）

山焼の漢戻りて焦げ臭し　孤舟　（五・と・堂・亜・天）

夜桜や城を従え闇に勝つ　けい子　（くす・忠・孝・康・盛）

◎うららかや身の隈ぐまに眠り神　百合子　（孤・孝・己・け・盛）

春愁や更地となりし独身寮　堂哉　（くす・く・清・昇・百）

四点

雪形の生(あ)れて忙しや野良仕事　くにお　（と・康・○隆・天）

黄砂降るモンゴル船のいかり石　康敏　（忠・健・亜・け）

花時や時は移ろい待ちもせず　正己　（くす・孝・龍・百）

春の陽や憂さも微睡み心地よし　正己　（孝・○龍・國・百）
◎蹲の水音軽し菫草　啓子　（孤・己・堂・正）

三点

穴子飯ゆっくりと待つ雨の島　五郎太　（そ・ゆ・け）
◎散る桜ひとひらふわり唇に　千恵　（孤・隆・亜）

白川郷にて

春日射す囲炉裏料理を堪能す　ゆたか　（國・天・三）
四月馬鹿秘訣は嘘の匙加減　昇　（忠・と・ゆ）
飛び去りし羽音にゆれる雪柳　百合子　（く・た・堂）
山吹の散るや石垣野面積み（のづらづみ）　啓子　（千・百・三）
春陽射す遺跡掘る場や時の海　仝　（堂・○己・清）

二点

春雷や草木目覚め田目覚め　忠彦　（千・三）
桜散る見事に舞て土となる　仝　（ゆ・國）
◎春眠や夢の続きはまず見ない　仝　（孤・隆）
濡れ桜ひとひらごとに色深く　仝　（己・國）
星朧離別はある日突然に　孤舟　（堂・三）
山葵田の水滔滔と清冽に　仝　（く・五）
ご当地のお好み焼きや瀬戸は春　五郎太　（ゆ・正）
たわわなる山吹の黄よ好ましく　千恵　（龍・國）
◎畏みて花の皇居を通り抜く　昇　（孤・五）
「音羽屋」と掛かるお練りや桜咲く　ただしげ　（忠・隆）

一点

囀りに目覚まし朝の光満つ　忠彦　（己）
奉納を終えし社中に春の風　五郎太　（啓）
桜まじ川辺なる原爆ドーム　仝　（隆）
春季展本物は美（は）しシモネッタ　とみ子　（盛）
花吹雪三毛の見上げるマリア像　仝　（清）・
のどけしや宴始まる午後三時　千恵　（昇）
ほっとする週末の朝春来たる　ただしげ　（○盛）
花筏風に流されゆらゆらり　仝　（そ）
桜散る戦ある国命散る　ゆたか　（忠）
◎裸婦像の足の先まで春日射す　仝　（孤）
ラケットにテニスコートの花吹雪　仝　（○健）
読経終へ妻と一献彼岸かな　堂哉　（た）
風運ぶ菜の花畑野の匂ひ　國護　（た）
菜の花や黄色の絨毯幸せを　仝　（と）
菫咲く裏道たちまち宝塚　正明　（た）
乱れがちの保育児の列つつじ咲く　仝　（た）

瀬戸内の小島連なり麗らけし　　昇　（ゆ）
フリージアふと花束で見たくなり　　亜也　（正）

※今回、天牛さん、盛雄さんのお二方のご出句が編集ミスで漏れており、選句のみにてご了解いただきました。句友の皆さまには、選句のみとなっていることに不安を感じられたと存じます。茲に深くお詫び致します。

§§§§§§§§§§

## 【句　評・短　評】

### 十点句

**親友の妻より封書春の雷**　　堂哉

龍平さん・・・はて　何の知らせ？朗報と思いたいけど・・

康敏さん・・・ドキッとさせられる句です。何回か同じ経験があります。

百合子さん・・何事かと思ったその気持が春の雷で伝わってきました。

三恵さん・・・待ちに待った吉報なのか、突然の凶報なのか。「春の雷」が暗示しているのは一体どちら？意味深でミステリアス。思わず深掘りしたくなる句ですね。

**花を出て花へと戻る観覧車**　　昇

孤舟選者・・・人の一生は花として誕生し、ぐるっと回って花とし死を迎える。

とみ子さん・・観覧車のてっぺんからも花盛りが　よく見渡せたでしょう。

龍平さん・・・綺麗な句。それでこれは如何？

《花の句の花の推敲花の春》４月20日朝日俳壇より～

康敏さん・・・下部は花の海に浸っている巨大な観覧車、頂点から見る景色は素晴らしいでしょうね。

堂哉さん・・・私も最高のシーズンにのんびりと乗った気分になりました。

亜也さん・・・当たり前のことに発見するちょっとした感興。

### 九点句

**ふらここの鉄の匂ひの手を洗ふ**　　康敏

孤舟選者・・・ブランコの握り棒を落ちないように力を込めて握り締めていると、鉄さびが掌に。

五郎太さん・・汗ばむせいか鉄棒でもこうした匂ひがします。幼かったころあるいはじじの思い出でしょうか。

千恵さん・・・ブランコからおりたら手に鉄の匂いが残っている。やはりあの匂いは手を洗いたくなります。

亜也さん・・・久しく忘れていた嗅覚が言葉だけで自分にも蘇る不思議。

天牛さん・・・別に手を洗わなくてもいいでしょうにね‼

### 七点句

**春深し卒寿を見舞ふ米寿かな**　　健介

千恵さん・・・「見舞ふ」に長い付き合いの友人二人と読みました。共に歩んできた間柄が感慨深いです。

ゆたかさん・・お年寄り同志のご交友が微笑ましいです。

百合子さん・・多くを語らずとも、お互いの顔を見るだけで・・

**カステラの薄紙剥がす花曇**　　康敏

孤舟選者・・・花曇りで愁い勝ちのなか、カステラの薄紙がなかなか剥がれない。

とみ子さん・・薄紙に砂糖粒を持っていかれぬよう慎重に紙を　剥がさないといけません。そういう作業には　花雲の午後がぴったりですね。

昇さん・・・・うっかりするとカステラの薄紙は食べてしまいます。薄紙を剥がすのは鬱陶しいもの。花曇が効果的です。

**チューリップ紙からはみ出す園児の絵**　けい子

孝岳さん・・・幼児の溌剌とした活発さが良く表現されている。「紙からはみ出す」が好ましい。

隆さん・・・・・イラストレーター矢吹申彦さん（故人）は、子供は大きく描けと。

天牛さん・・・こうゆうのは本当の爺さんでなければ経験することはできません。

六点句

**天穹に獣道あり鳥帰る**　　孤舟

康敏さん・・・北へ帰る鳥の群れ、空にいつもの帰り道があると見た。

正明さん・・・大空に帰る鳥の道があるとは　大きな風景ですね

**磯の香の膨らんでくる焼栄螺**　　孤舟

ただしげさん・焼栄螺の香ばしいかおりが漂ってきそう。

康敏さん・・・栄螺の壺焼きジクジクと汁が煮零れるときの香は堪りません。

天牛さん・・・醤油でもたらせば、さざえの香が一層引き立ち、うまそうになりますよね。

**目を閉じた野仏に会う春うらら**　　けい子

五郎太さん・・春の暖かな日差しのなかで気持ち良さそうに目を閉じていらっしゃいます。

千恵さん・・・春の野で野仏に出会うなんてのどかでいいですね。

亜也さん・・・何ともいいがたいこの世にあることのありがたさ。

五点句

**鳥雲に戊辰の役の墓群かな**　　くにお

孤舟選者・・・戊辰戦争で多くの犠牲者が出た。しかし鳥たちは一羽も欠けずに北方へ旅立った。

五郎太さん・・新潟とか東北には薩長政府軍と戦った兵の墓があります。墓群が効いています。

千恵さん・・・戊辰の役で多数が亡くなった場所なのですね。切ない気分と鳥雲の季語が同調しますね。

**山焼の漢戻りて焦げ臭し**　　孤舟

五郎太さん・・そうだろうなと想像ができます。

とみ子さん・・焦げ臭い匂いが、付きまとっている様子が　可笑しいです。

堂哉さん・・・大層危ない仕事ですよね！火傷をなさる人もおられるのかな？

亜也さん・・・生々しすぎる感あるも、実感の気迫に思わず一票。

天牛さん・・・だんだんこうゆう実感がわかる人が減っていくでしょう。

**夜桜や城を従え闇に勝つ**　　けい子

康敏さん・・・下五が力強い。但し、上五の切字は無用、「夜桜の」と一句一章にするべきと思います。

**うららかや身の隈ぐまに眠り神**　　百合子

孤舟選者・・・春眠暁を覚えず。眠気を促す眠り神が全身を支配しているのだ。

**春愁や更地となりし独身寮**　　**堂哉**

百合子さん・・時代の流れを感じる情景ですね。独身寮も家族寮も保養所もみんな姿を消しました。

## 四点句

**雪形の生(あ)れて忙しや野良仕事**　　**くにお**

とみ子さん・・農鳥とか　地方により形も呼び名もさまざまらしい。実際に見てみたいです。
康敏さん・・・景が見えます。中七の終りを「生れて忙しき」と連体形にして一句一章にした方が、リズムが良くなると思います。
隆さん・・・・百姓は意外と細密な仕事なのである。村にはリーダー役の百姓が必ずいる。
天牛さん・・・句友の中に忙しなく野良仕事のような重労働をしている方がおられるのですか、驚きです。

**黄砂降るモンゴル船のいかり石**　　**康敏**

亜也さん・・・いずれも由来はゴビ砂漠？巧みな季節と景色の取合わせ。

**花時や時は移ろい待ちもせず**　　**正己**

百合子さん・・何事もなかったかのように今年も咲く花、色々あった一年だったのに・・・

**春の陽や憂さも微睡み心地よし**　　**正己**

龍平さん・・・自然の力は万能
百合子さん・・確かに春の陽ざしには、憂さも溶かしてしまう心地よさがある。

**蹲の水音軽し菫草**　　**啓子**

孤舟選者・・・茶庭の手水鉢から規則的な水音が。傍らの菫草が耳を傾けている。
堂哉さん・・・綺麗な庭に清らかな音が聞こえています。

## 三点句

**穴子飯ゆっくりと待つ雨の島**　　**五郎太**

ゆたかさん・・アナゴ飯は私も好物です　美味しいです。
※康敏さん・・上五と下五を入れ替えて「雨の島ゆっくりと待つ穴子飯」としても句が成り立つ観音開きの句になっています。安定性に欠けるとされているようです。

**散る桜ひとひらふわり唇に**　　**千恵**

孤舟選者・・・桜吹雪が全身に。なんと唇にも花弁がひとつ貼り付いた。
隆さん・・・・花びらが離れて唇に着くまでの軌跡は極めて稀有な時間である。
亜也さん・・・一種の官能美。

白川郷にて

**春日射す囲炉裏料理を堪能す**　　**ゆたか**

天牛さん・・・外はまだ雪が積もっているでしょうね。そこに一すじの春光ですね。

**四月馬鹿秘訣は嘘の匙加減**　　**昇**

とみ子さん・・年の功でしようか。
ゆたかさん・・嘘の匙加減が面白いです

**飛び去りし羽音にゆれる雪柳**　　**百合子**

堂哉さん・・・なんとも静かな世界

**山吹の散るや石垣野面積み（のづらづみ）**　　**啓子**

千恵さん・・・なぜか郷愁を誘う石垣に山吹の花びらが舞う情景が浮かびます。

百合子さん・・野面積みを詳しく知りたくて、穴太衆、日本の伝統的土木技術の素晴らしさを知りました。

**春陽射す遺跡掘る場や時の海**　　**啓子**

堂哉さん・・・下五に感心しました

正己さん・・・遠き古の世界が春の温かい日の中でその全容が見え隠れする。ロマンを感じます。

## 二点句

**桜散る見事に舞て土となる**　　**忠彦**

ゆたかさん・・土となるとの表現が斬新で。

※句会中にて・・・「舞て」のこの場合は動詞であるため、送り仮名が必要。「舞いて」あるいは「舞ひて」。

**春眠や夢の続きはまず見ない**　　**忠彦**

孤舟選者・・・途中で終わった夢の続きを見るのは難しい。

隆さん・・・・詩はことばとことばの間を描く芸術と。散文調は避けたい。私は、続きの夢を見た。例外かも知れない。「春眠や夢の続きに出会ふかな」　　**孤舟**

**山葵田の水滔滔と清冽に**

五郎太さん・・栽培には清冷な湧き水が大事と聞きます。

**ご当地のお好み焼きや瀬戸は春**　　**五郎太**

ゆたかさん・・ご当地は広島ですね　広島のお好み焼きの味は東京や大阪の味とは異なる味があります。

**畏みて花の皇居を通り抜く**　　**昇**

孤舟選者・・・大阪造幣局の通り抜けとは異なり、皇居の桜は畏れ多い。

五郎太さん・・「畏みて」、「花の皇居」がすっきりとし、上手です。

**「音羽屋」と掛かるお練りや桜咲く**　　**ただしげ**

隆さん・・・・「花のなかターヤ！と飛び交ふお練りかな」でも。神田明神で八代目菊五郎、六代目菊之助襲名披露のお練りを見た。

## 一点句

**奉納を終えし社中に春の風**　　**五郎太**

啓子さん・・・神社奉納のお能、舞もあったでしょうか。社中には奉納を終えて緊張が解けた空気が流れています。春の風が良いですね。その空気を一層和らげているようです。

**桜まじ川辺なる原爆ドーム**　　**五郎太**

隆さん・・・・「花筏原爆ドームの嘆きかな」でも。敗戦確実な日本へ原爆投下。ガザ攻撃と同じ。

**裸婦像の足の先まで春日射す**　　**ゆたか**

孤舟選者・・・十和田湖畔の乙女像に、桜の木漏れ日が降り注ぐ。

**ラケットにテニスコートの花吹雪**　　**ゆたか**

健介さん・・・私はクラブで最長老ながら、何とかテニスを続けていますが、テニスの俳句は難しいです。この句は簡易明朗で納得です。

**読経終へ妻と一献彼岸かな**　　**堂哉**

ただしげさん・御夫婦のほのぼのとした日常が感じられる。

**風運ぶ菜の花畑野の匂ひ**　　**國護**

ただしげさん・菜の花畑の野の香りが漂ってきそう。

菜の花や黄色の絨毯幸せを　　國護
ただしげさん・黄色一色の野心休まり、幸せを感じそう。

菫咲く裏道たちまち宝塚　　正明
とみ子さん・・「菫の花咲く頃」を母がよく歌っていました。母のお供をして歌劇にも小さい頃からよく行きました。懐かしい思い出です。

乱れがちの保育児の列つつじ咲く　　正明
ただしげさん・近所で良く見受けられる風景を上手く捉えている。

瀬戸内の小島連なり麗らけし　　昇
ゆたかさん・・情景が目に浮かびます。

（俳句の部・了）

■■■■■■■■■■

## 【次回青葉会予定】

五月22日（木）は恒例の「吟行」を実施致します。（雨天決行）

吟行の場所：千代田区九段　皇居北の丸公園

☆吟行集合場所：10：30 地下鉄東西線、半蔵門線　都営新宿線　九段下駅　6番出口エレベーター前。⬇遅れた方へ・・10：45～10：50には「田安門」をくぐります。
（6番出口はエレベーターがあるので、6番出口からエレベータで地上に出た後、「田安門」から北の丸公園に入ることに致します：前回のご案内で4番出口としましたが変更です！）
集合予定の時間に遅れる、或いは場所が分からない、という方は星田 ☎080-8870-8201）までお電話を！

☆句会集合場所：13：00　丸紅株式会社　4階　会議室（青葉会で予約しております）
丸紅での句会開始までにランチ時間を設けます。到着地は竹橋ですので、よくご承知と存じますので、説明は省きます。一方、北の丸公園にも軽食場所があります。但しここで休憩兼ランチをされる方は、北の丸公園のほぼ中央に位置にあるため、時間が読みにくい事情から夫々のご希望により、13時の句会開始時にお越し頂くことで良しとし、お任せ致します。

☆ご出句について
吟行にご参加の方：当季雑詠2～3句、吟行時に2～3句　の五句をお願い致します。
※ご出句戴く際に、独自で歩くご希望がある方は、その旨、お知らせくださいますようお願い致します。（待合わせの関係で）
ご投句のみなさま：当季雑詠　いつものように　2～3句を目処にご出句下さい。

☆今回の吟行ご参加の方には、句会に於いて、通常と異なる段取りがありますので、ご説明いたします。（嘗て青葉会でも執っていた方法です）
1. 集合時～30分程度　各自　句を書く短冊を配布します。これに吟行中の作句分を記入。
2. 記入した短冊をご出席者全員に分け、当方にて配布する「選句用紙」に転記いただきます。
3. 先に準備した皆さまのご出句、ＰＣ作成の選句表と、当日作成の「吟行時選句表」の2点を並べて6句選をお願いすることと致します。

※吟行ご参加無い方には、吟行句も別途ＰＣにて作成し、お送り申し上げます。

☆歩かれるご参考として、地図を入れました。
https://www.env.go.jp/garden/kokyogaien/2_guide/kitanomarukoen_area_guide_map.html

**ルート例**：北の丸公園北側の田安門から北の丸公園に入り、南に下る形で散策・作句、国立近代美術館を目指し、竹橋に出るルートを考えております。
※この地域についてはご存知の方も多いと思いますので、ご参加の方に就いては、ご自分のお好きなルートで行く、待ち合わせに間に合わないなど、ご都合に合わせ、北の丸公園を吟行場所として作句されれば、ご自由に動かれて、十三時に丸紅４階会議室に集合されることで構いません。

❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖

【青　葉　会　報】

一、　4月句会は、9名のご参加で　冒頭、次に掲載致します宮内様の訃報をお伝えし、少なからず動揺した雰囲気の中で、選句、披講と続きました。句友の皆さまから寄せられた選句を合わせた結果はご覧の通り、十点が最高点で、堂哉さん、昇さんのお二方。次点は九点の康敏さんでした。

§§§§§§§§§§

二、【訃　報】

宮内　規雄様　　令和七年四月十四日　ご逝去されました。享年八十六歳

四月十七日に御長男の宮内雅崇様から、事務局宛にご連絡いただきました。

お名前そのままの「規雄」の俳号を以て、句友として長年青葉会に尽くされ、昨年十二月までご出句戴いておりました。今年になって、お電話にて、なかなか俳句も簡単ではなくてねえ。。と、ご出句も、選句も、出来る時に・・・と仰っていただきましたもののそのままとなり、三月分の青葉会句会報が宮内様のお手許に届いた頃、幽冥境を異にされたと存じます。ご子息様のお話に依れば、三月にご病気で入院され、四月に入り、明日退院という日に急逝された、と、予期せぬ中でのことだったと伺いました。

茲に　在りし日のお姿を俳句から偲ばせていただき、心からご冥福をお祈り申し上げます。

晴れ渡り晴れ渡りけり師走空　　（青葉会令和六年十二月、最後となりましたご出句）

NHK俳句での入選句が入手できましたので、追悼の意味でここにご披露申し上げます。

妻逝し病棟の窓春ともし　　（平成二十八年　六月号に掲載）

角帽や底冷えの京ニーチェ手に　　（平成二十九年　十一月テレビ放映）

句友の宮内様と句作に励まれた皆さまからの追悼句を頂ければと存じます。頂戴した追悼句は、既に頂いている句を含め、次号青葉会報にて掲載させていただきます。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

§§§§§§§§§§

三、孤舟選者近詠

青雲の志持ち揚雲雀

美しき嘘なんて嘘四月馬鹿

初めてのルージュを塗られ春祭

佐保姫の羽衣懸かる三保の松

木片をひとつ残して雁帰る

四、【関係者近詠】

気負ひごと何もなきなり己が春　　盛雄

――毎日新聞・兵庫文芸　若森京子選――

文のみの見舞いは虚し四月尽　　盛雄

花種蒔く若き気持ちのダイヤ婚　　仝

小犬連れてカフェテラスへ花疲れ　　仝

※以上三句、本来は四月選句に入るべく頂いていた句です。

クリスマス終ひの汁の具だくさん　眞希子
冬晴や徐行車に謝す救急車　仝
筆無精病が書かす年賀状　仝
山陰の西端の雪潮風味　仝
血を貰ひ退院といふ年用意　仝

栗櫟紅葉松葉の落葉焚　弘子
焦げぬやうに焙るマシュマロ落葉焚　仝
十文字に真木撮棒組む焚火守　仝
薪焼べて火吹きひと吹き焚火守　仝
墨色の身を寄する鯉近松忌　仝
橋を行く傘深々と近松忌　仝
土手の味噌崩れて牡蠣のふくら肉　仝

――「森の座」令和七年四月号　横澤放川（日経俳壇選者）選――

めでたやなあらたまの年つつが無し　青史
初詣艶治目を引く抜衣紋　仝
喰積の昆布巻殊によかりけり　仝
譲られて邯鄲の夢初電車　仝
初句会弓爾乎波に朱の入りたる　仝
新日記ひらがな多くなりにけり　仝
わが世（せい）に「戻り」あらばや絵双六　仝

令和七年五月九日

（了）